Kaito Kimura
機村械人
イラスト 兎塚エイジ
Illustration : Eiji Usatsuka
そのオーク、前世もヤクザにて
The yakuza called the ogre becomes the orc called the devil.
GA文庫

Page.2
〝Dark catcher〟

The yakuza called the ogre
becomes the ork called the devil.

カバー・口絵　本文イラスト
兎塚エイジ

レイガスが《天翼の騎士団》の雑務奴隷となって、数日が経過した。
彼との交流や、その働きぶりを目にし、当初は怪訝な反応を示していた団員達も態度を変えていった。
「確かに、奴は仕事ができる。手先も器用だし対応も適切で迅速だ。だが騙されるな。結局のところ、奴はオークだ」
野営地の真ん中。屹然と仁王立ちし、ヴィオラは言う。彼女の視線の先には、焚き木の束を肩に担ぎ運んでいるレイガスの姿がある。
「まぁまぁ、ヴィオラちゃん。そんなにムキにならないの」
「ムキになってなどいない！」
そのヴィオラの足元に体育座りをしていたタウが、彼女を見上げながら言った。
「そんな事言っても、実際のところとりたてて被害もないんだしニャー」
続けてタウの横、草の上に寝そべった姿勢で、金色の刺繍が施された白いフードを被った女がのんびりとした声で言う。眼鏡をかけ、その奥の目を細め、手元に分厚い本を開いている彼女は半猫の亜人――マニスという。
「いいか。奴等オークは生来野蛮な種族だ。力ばかり強く知能は低く、獣と変わらない」
遠方――焚き木を運び終えたレイガスが、服の胸元を叩きながら汗を拭っている。
汗に濡れた分厚い胸板がチラチラと見える。

「確かに、野性的ね」
「ワイルドだニャー」
「そういう事を言っているんじゃない！　……それに、奴等は粗暴で悪辣で元来心根が醜悪だ。面白半分、冗談半分で弱者を甚振り、女子供に恐怖を与える」
遠方――きゃっきゃと笑いながら、ミュウとミャアが焚き火を起こし始めたレイガスの周りを走り回っている。
「おい」
野太い声で、レイガスが二人を一喝した。
「火を使ってるから危ねぇぞ。少し離れたところで遊べ」
「はーい」
「はーい」
「確かに声は怖いけど」
「優しいニャー」
「お前達、騙されるな！」
躍起になったヴィオラが腕をぶんぶんと上下させ、熱弁を振るいだした。マニスとタウは顔を見合わせて苦笑する。
「いいか！　何と言っても、オークはその体液や体臭が女の本能に働きかけて一種の発情効果

を促すという下種の極みのような生き物でだな！」
「わーったわーった、わーってるよ、姉御」
そこで、ヴィオラの後方から二人の女が歩みよってきた。一方は、鍛え上げられた身体つきの、正に女戦士といった風貌の赤毛の女。もう一方は、変わった意匠のドレスを着て、頭部の左右におダンゴを作った、目の下に大きなクマのある女だ。
「ソルナ、ミン」
呼ばれた二人の内、女戦士――半獅子の亜人のソルナが、ヴィオラの肩に腕を回した。
「要は、調子に乗らないように釘を刺せばいいんだろ？　今から、体に上下関係を教え込んでやるよ」
言うが早いか、ソルナはヴィオラの制止も聞かず、「おーい、オーク」と、レイガスの方へずんずん進んでいく。
「わー、見事な体育会系のノリ。清々しい程の脳筋だヨー」
どこか抑揚のおかしい片言の言葉で、半猫熊の亜人――ミンは、そう言った。

■□■□■□

野営地の中央で、団員達が輪を作っている。その輪の中心――皆が固唾を飲んで見守る視

線の先には、向かい合う二人の姿があった。
「……どういう事だ？」
一方は、屈強な肉体に強面の半豚の亜人――レイガス。このいきなりの状況に、首筋を掻きながら問う。
「いや、なに、ここ数日でお前の凄さはよくわかったよ。よくできる雑用だって事はな」
相対するのは半獅子の亜人。女ではあるが鍛錬を積んだ剛健な肉体をしている。赤毛の女、ソルナは、微笑混じりに言った。
「ただ、だからっつって調子に乗られるのが姉御は心配みたいでよ」
レイガスが、ちらりと横目を流す。しかし、ヴィオラが慌てて何かを言うよりも早く、ソルナは続いての台詞に移っていた。
「要は、自分の立場を今一度はっきり理解してもらおうってわけよ。きちんと、雑用としての立場をな」
ピリピリとした緊張感が場に満ちている。その空気におろおろしていたサビが、助けを求めるようにヴィオラを見る。
「……言われなくても、よく弁えているつもりだ」
ふぅっ、と溜息を吐きながら、だがレイガスはソルナから視線を切らない。
「……と言って、引き下がるような性分でもなさそうだな」

「くっくっ、話が早くて助かるぜ」
笑うソルナ。同時、彼女の重心がゆっくりと下がる。
「収容所で大暴れして追い出されたんだってな。じゃあ、それなりに腕っ節には自信があんだろ？」
「……」
「純粋に戦ってみてぇんだよな、お前と」
「お、おい、ソルナ」
一気に臨戦態勢に没入したソルナに、ヴィオラが言葉を挟もうとした。
「問題ないヨー、団長」
そこで、横に立っていたミンが悠長に言う。
「ソルナの肉弾戦力はうちの騎士団最強だヨー。そう簡単に負けるような事はないヨー」
「そうじゃなくて……」
ヴィオラの困惑をよそに、戦いは音も無く開始されていた。
ソルナが構えを取る。腰を浅く落とし、若干の前傾姿勢、そして拳（こぶし）を作った両腕を頭の高さに持ち上げたヒッティングスタイル。
「どうした？　構えねぇのか？」
「……構え、か」

そんなソルナの姿を見ても、レイガスは動かない。しかし何かを思い起こすように、少し目を伏せる。

『りゅーへーってさ、格闘技とかに興味ないの？』
『ふーん、じゃあ、これとかどう？』
『まぁ、喧嘩（けんか）最強っていう肩書もかっこいいけど、神秘の拳法使いって設定も中々おもしろくない？』

「……」
瞬間、レイガスは構える。両腕を胸の高さに上げ、前に出した方の手のみ拳を作る。右半身を前に向けた、特異な構えだった。
「ムムッ！　アレは正しく東洋に伝わる伝説の拳法〝じー・くん・どー〟！」
「知ってるにょニャ？　ミン」
目を輝かせるミンに、体育座りのマニスが言う。
「容赦無い急所攻撃や、速撃速打のコンビネーションを特徴とする喧嘩特化型の拳法だヨー。byミン明書房（めいしょぼう）」
「へー、変わったスタイルだな」

「見よう見まねだ、気にするな」
若干バッが悪そうにレイガスは言う。その間にも、ソルナはじりじりと摺り足で間合いを潰している。対し動きは無いものの、その距離感を警戒するレイガス。
一瞬、ソルナがにやりと笑う。刹那、彼女の姿がレイガスの視界から消えた。
タックルだった。ソルナの両腕がレイガスの足を取る。虚を突かれ、地面に倒れるレイガス。ソルナは瞬時にその腹の上に体重をかける。テイクダウンから瞬く間、マウントの様相が完成した。一同の間にざわめきが起きる。
「へへっ、一気に劣勢だな」
騎乗の姿勢となったソルナが、眼下のレイガスへと揚々と言う。
「どうするよ？　降参すんなら、今のうちだぜ？」
「……暢気にくっちゃべって、自慢の筋力を見せつけたらもう満足か？」
対し、レイガスは動じない。それどころか挑発するような発言をする。その言葉に、ソルナは顔から笑みを消す。
「……へっ、だったら今からもっと味わわせてやるよ！」
振り被っての大振りのパンチだった。拳の先はレイガスの顔面。直撃すれば、骨までダメージが達する重さの乗った鉄拳である。思わず、サビが顔を覆う。
だが、その拳は空を切る事となった。パンチの振り抜き様、合わせるようにレイガスが上体

を起こす。そして、拳撃を振るい切った状態の右半身側に体を潜り込ませると、そのまま押し倒すように体重をかける。
「うおっ⁉」
声を上げるソルナ。形勢が逆転した。但し、今のソルナは腹這いの状態で地面に伏しているため抵抗のしようがない。レイガスの大きな手が頭を押さえ、もう片方の手が首を掴んでいた。ぐっ、と力が込められる。
「……後はへし折るだけだ。決着でいいな？」
その言葉に、審判役として立たされていたトラッタが頷いて腕を振った。
「すごい！　勝っちゃった！」
「ソルナより、ずっとつよーい‼」
「ぐあー！　認めねぇぞ！　オレが力勝負で負けるなんて！」
立ち上がったレイガスの足元に、ミュウとミャアが駆け寄って来て囃したてる。同時、起き上がったソルナも雄叫びを上げてレイガスを睨んだ。
「もっかいだ、もっかい！　もっかい勝負しろ！」
「確かにパワーはある。よく鍛えてるな。足を取られた時は俺も素直に驚いた」
興奮するソルナだったが、続いてレイガスの放った真っ直ぐな褒め言葉に一転して動きを失う。

「お、おう」
「だが、それに頼りすぎだ。もう少しコンパクトに纏めれば今以上に強くなれるぞ」
面喰らったように目をぱちくりとさせて、ソルナは数瞬沈黙した後。
「なぁ、もっかい。どうすればいいのか教えてくれよ」
「俺だって我流だ、上手く教えられる自信はねぇぞ」
まるで子供のような顔で、レイガスへと話し掛ける。
「あらあら、うふふ」
その光景に再び「むっ」とした顔となるヴィオラを見て、タウは微笑みを浮かべる。
「……何がおかしい」
「別に〜」
――瞬間、途轍もない爆音が野営地に轟いた。

■□■□■□

まるで火薬庫を丸々一つ、火の不始末で吹き飛ばしたかのような音だった。大地が激震し、空気が鳴動し、その場に立つすべての者達の聴覚と体幹が狂わされる。
「なに――」

ごとだ、と、繋げられるはずだったヴィオラの発言がそこで打ち切られた。その原因が何なのか、ヴィオラのみならず全員が理解したからだ。
丘陵の奥の森から、何か巨大なものが来る。木の葉が舞い、鳥は空へと逃げ、迫る何かの存在を明瞭にしていく。やがて木々を薙ぎ倒し、それは緑の中から陽光の下へと姿を曝した。マニスが呟く。
「『ブアルホーン』……ニャ」
それは、巨大な牛のような生き物だった。茶色い体毛で全身を覆い、頭部に生えた一対の角。血走った眼に、涎を撒き散らす口腔からは暴風のような息が吐かれている。しかし、それらよりも先に着目すべきは――。
「なんだありゃあ！　でか過ぎるぞ！」
そうソルナが狼狽するのも無理はない。その体軀は、普通の牛の数十倍近くある。頭部の位置など見上げるほどだ。怪獣のような牛だった。
「おそらく変異種だニャー」
間延びした暢気な口調だが、マニスの声音には困惑が混じっている。その間にも、ブアルホーンは咆哮を発し、大地を踏み荒らしながら突っ走ってくる。目を血走らせ、首を振るって、こちらに向かって。
「ともかく何とかしないと！　このままじゃ野営地が潰されるよ！」

トラッタが叫んだ直後、ヴィオラが動く。
「サビ！　ミュウとミャアを連れてできるだけ遠くへ避難しろ！」
だが、どうやって止める。相手はブアルホーンの変異種。全長は10メートル近くある。おまけに狂乱しており、見境なく暴れている。普通なら、これだけ巨大な生き物を生け捕る場合は足を取るための穴を掘ったりするが、今はそんな余裕はない。
野営地のみならず、このまま進行が進めば――街が危ない！
しかし、相手は考える余裕さえ与えてくれない。その巨体はもう、目と鼻の先だ。
「ミン、ソルナ、トラッタ！　武器を持て！　タウ、《魔縄》の準備を！　それまで我々で気を引く！」
「待ってヴィオラちゃん！　私が《魔術式》を書き込むには時間がかかるし、あれだけの巨体を動けなくするにはもっと人手が必要だわ！」
「イーヴィは……くそっ、駐屯所か。マニス！　街に走って応援を呼んでくれ！」
迎撃の準備を始める団員達の一方、ヴィオラはマニスを振り返り素早く指示を飛ばす。
「領主宮に連絡し増援の要請を！　加えて市民の避難を優先するんだ！」
「了解！」
言うが早いか、マニスは駆け出す。半猫の亜人である彼女の脚力はかなりのものだ。しかし、単純な歩幅は巨体のブアルホーンの方が遥かに上であり、速度は伯仲といったところだろう。

その時、疾駆するマニスの体が空中に浮かび上がった。
「ニャ⁉」
「街中を駆け回る余力を残しておけ」
マニスを掴み上げ背負うと、レイガスはその身を躍動させた。
「そこまで、俺が繋ぐ」
「レイガス⁉」
背後から聞こえたヴィオラの声も関せず、レイガスは走り出す。途中、立てかけてあった鉄の剣を一振り剝ぎ取り、それを背中のマニスに持たせた。
「あれは一体何だ」
そして――遠く、野営地にて武装した《天翼の騎士団》と応戦となり、怒号を噴き上げている怪物について、レイガスは問う。
「ブアルホーンだニャ」
レイガスの首に腕を回して振り落とされぬよう力をこめながら、マニスが答える。
「巨大な牛型の獣の一種ニャ。体毛は革のベルトみたいに硬くて強靭。主に飼育されて食用か、もしくは牛車などの動力として使われる事があるニャ」
「詳しいな」
むふー！　と胸を張るマニス。掃除係のレイガスは知っている事だが、彼女のテントの中に

は私物として大量の本がある。動物図鑑、風土書、歴史書……おそらく、知識だけなら《天翼の騎士団》の中でも一番だろう。

「でも、あんな大きさは異常ニャ。近隣で目撃情報も無いから、普段は森の奥で大人しくしてたのかもしれニャいけど……それがどうして――」

瞬間、マニスの言葉尻を粉砕するように、発生した衝撃波が二人を襲った。

何事か――と振り返るまでも無い。ブアルホーンが、邪魔者が阻む野営地を一足で跳躍し、飛び越えたのだ。そして再開した激走の向かう先は、大都アルバストラ。暴走は止まらない。瞬く間、レイガス達の真後ろにまで追い付き、追い越そうとしている。このままでは、外層の住民区域が危ない。こんな暴れ牛が飛び込んだなら、未曾有の惨事に発展するのは火を見るより明らかだ。

「駄目ニャ……間に合わない……」

一歩の差が、文字通り大きすぎる。ブアルホーンの体が、真横を過ぎ去っていく。マニスの顔が、悔しさで歪む。

「おい、こいつには何か〝弱点〟はないのか」

そこで、マニスの耳に届いたのは、彼女が乗ったレイガスが、全力疾走の呼吸の狭間から捻り出した声だった。

「ニャ？」

「弱点だ。この牛の弱点みたいなものを知ってねぇのか」

「く、首の後ろニャ。体毛も皮膚もそこだけは薄くて、皮の下にはすぐ首の骨があるニャ」

「つまり……脊椎か」

「そこに衝撃を与えれば、もしかしたら……でも、それは普通のサイズの話ニャ。あんな大きさじゃ、どうしたって――」

「今からこいつの頭に上る」

レイガスは言った。

「剣と俺を死んでも離すな」

「……今ニャんて？」

「上まで行ったら、具体的な箇所を教えてくれ」

言うが早いか、レイガスは大地を一段と強く蹴り抜く。飛び付いた先はブアルホーンの前足。その強靭な体毛にしがみ付く。

「ニャニャニャニャ、ニュアアッ！」

走っている――即ち、上下前後に激しく稼働している足に飛び乗ったのだ、全身が振り回される事になる。マニスは必死でレイガスにしがみ付く。レイガスは、ブアルホーンの体毛を掴みながら徐々に上へ上へと昇っていく。当たり前だがこうも簡単にできるような事ではない。ブアルホーンは疾駆を一時停止し、体にくっ付いてきた蚤のような生き物を振り落とさんと暴

れ回る。それによって発生する衝撃、重力を、腕力と握力のみで耐えながら、レイガスは魔獣の体を登頂せんとしているのだ。

「むちゃくちゃニャーーーー！」

マニスが叫びたくなるのも無理はない。だが、その無茶苦茶をレイガスはやってのける。

到達したのだ。首筋の上へ。飛び乗り、両の足で踏みつけ、アルバストラの街並みをパノラマで鑑賞できるほどの高さまで登り切った。その光景に、その現実に、刹那だけマニスは力を緩めてしまった。

体の芯まで襲い来る衝撃に、マニスの体が吹っ飛びそうになった。しかし、レイガスがすかさず彼女の腕を掴んで、抱き締めるように胸元に抱え込む。

「ニャ……」

「ここか？」

一瞬呆けたマニスだったが、レイガスの言葉に我を取り戻す。レイガスの足元、隆起した皮膚が見える。この下に背骨が埋まっているという何よりの証拠だ。

「うん！　ここニャ！　ここ！」

「……人間や魚と大して変わらねぇな」

そう呟いて、レイガスはマニスが抱きかかえていた剣を受け取る。

「よく離さなかったな」

「……ニャ！」

レイガスは剣を握り締め、大きく振り被る。そして、一瞬だけ目線を細め──。

「……しゅっ」

渾身の力で振り下ろされた刃が、ブアルホーンの首筋に深々と突き刺さった。

ドゴンッ──と、ブアルホーンの体が一度大きく跳ねた。走行も暴走も、全身の動きの全てを停止させ、その巨体が徐々に傾く。

そして、その足音以上の爆音を轟かせ、丘の上に横転した。白目を剝いて、完全に気絶している。

「何が起こった！」

ブアルホーンが地面に伏し、それと同時に大地に着地を果たしたレイガスとマニス。その二人の下へ、ヴィオラ達が駆けてくる。彼女達は驚愕の表情で横たわったブアルホーンを見て、続いてレイガスとマニスを見る。

「これは、一体……」

「レイガスが、剣を頸椎に突き刺したのニャ」

マニスがレイガスの足に抱きつき、むふふーと何故か誇らしげに笑いながら言った。

「死んではいないけど、これでしばらくは動けないニャ」

誰も何も言わない。否、言えなかった。「すげぇ……」というソルナの溜息が、鮮明に聞こ

える程の静寂が、彼女達の感嘆を表していた。
「間一髪……だったな」
レイガスは、すぐ間近まで迫っていたアルバストラの外層区域を見る。
「それほどの剣術、一体どこで……」
思わず、ヴィオラはレイガスへとそう尋ねていた。レイガスは自身の首を掻きながら、再びいつかのように、遠い目をして答える。
「大した事じゃねぇ……オヤジが釣り好きだったからな。獲物を〆るのに、〝活け締め〟が得意だっただけだ」

■□■□■□

その後、改めて呼び寄せた増援により、暴走した大型ブアルホーンは無事捕縛された。《天翼の騎士団》のみならず近場の《騎士団》にも応援を要請し、集まった魔術師達でブアルホーンの全身を《魔縄》にて縛り上げたのだ。
魔術式を書き込んだ縄――《魔縄》は、対象を捕縛するのみならず《魔氣》を通してその生物の体力を奪う効果も持つ。脊椎に剣を突き立てられているのもあるが、さっきまでの狂騒が嘘のように、ブアルホーンは大人しくなっていた。

さて、もう一つの問題である野営地の状況はどうか。丘の上は、ブアルホーンに踏み荒らされてどこもかしこも穴ぼこだらけだ。野営地にも少なからず被害が出ており、薙ぎ倒された材木やひっくり返ったテントが散乱している。
「ありゃりゃ、こりゃ大変だぁ」
黒い三角帽に、おどろおどろしいほど長い黒髪。〝魔女〟――イーヴィが、どこか愉しげにそんな光景を眺めていた。
「今頃の到着か、暢気なものだな」
その背後にヴィオラが立つ。険の有る声だった。
「勘弁してよ、所詮ボクは国定資格を持ってないモグリの魔術師――呪術師だよ？　応援に呼んだところで、正規の手続きがなければ呪文一つ唱えさせてくれないじゃないか。制圧対象がこのザマじゃ、応急使用も成立しないだろうしね」
ぺらぺらとよく回る口だ、と思いながら、ヴィオラは溜息を吐く。
「……それよりも、問題は何故こんな事が起こったかだ」
これほどの大きさ、このブアルホーンは突然変異種で間違いない。しかし、こんな巨獣が過去にも暴れていれば前例があるはず。何か、突発的な〝原因〟があるはずだ。
「毒草でも食っちまったとか？」
頭の後ろで手を組みながら、巨体を見上げてソルナが言う。

「この巨大な体に回る量の毒草を一気に食らったのか？　考え難いな」
「まさか……〝闇触れ〟？」
唇に指先を当て、タウが密かに呟いた。その単語に、ヴィオラが目を見開く。
「〝闇触れ〟？」
と、そこで声を放ったのはレイガスだった。捕えられたブアルホーンの周りを一周して戻ってきたところだった。その脇腹には、何故かまだマニスがご満悦の表情で引っ付いている。
「……以前話したかもしれないが……七年前、この周辺の地帯ではブアルホーンをはじめとした獣が、突然我を失って暴走する怪事件が多発した。当時のアルバストラが《呪われた土地》と称されて、誰も寄り付こうとしなかったのはそのためだ」
ヴィオラは一瞬戸惑った後、ぽつぽつとレイガスへ語り出した。
「その原因は、都の乗っ取りを計画していた呪術師集団が秘密裏に行っていた呪術の影響だった。その呪術の、《魔氣》の余波に触れた獣達がおかしくなっていたのだ。やがて、王都から派遣されたヴァンリミス殿が、同じく同行した騎士団と共にこの呪術師達を退治し、アルバストラは元に戻った」
以前、凱旋道で聞いた伝説だ。
「だが、その呪術師達が消え、この地は元に戻ったはずだ。だとすると……」
模倣犯？　同一犯？　あくまでまだ可能性の話だが、ヴィオラは眉間に皺を寄せ始める。

「……っ？」
そこで、だった。
不意にレイガスの触れた、ブアルホーンの前足の付近。丈の長い絨毯のような剛毛に埋もれ、そこに何かが埋まっているのが見えた気がした。手を伸ばし体毛の奥より探し出す。
そして引っ張り出した〝それ〟を見て、レイガスは眉を顰めた。
「……おい、何でこんなものがある」
「んニャ？　そんな〝雑草〟がどうかしたのかニャ？」
「……雑草？」
思わず聞き返してしまった。他の誰でもない〝マニスがそう言った事〟に、レイガスは一段と不可解な気分になる。
レイガスの手中。握られているのは植物の葉。
葉冠を中心に広がった五枚の葉っぱ。葉身の上を走る深い筋。見た目だけなら、確かに雑草にしか見えないかもしれないが。
「俺の知る限りこいつは……」
レイガスの、前世の記憶が正しいならば。
「……地上最悪の植物に分類される内の一つだ」
その植物は、〝大麻〟と呼ぶ。

幕間2
〝零の三条組〟

The yakuza called the ogre
becomes the ork called the devil.

〝零の三条組〟

そう呼ばれるようになった所以は実際のところ、『三条は今以上のものは求めない。その代わり、三条から奪う事は許さない』という、掲げられたただ一つの標榜によるものだ。

三条組の持つ土地は、クスリの取引、売春の斡旋、闇金融に至るまでを一切排除しており、警察の警戒も少ない。だが警察の目に留っていないという事は、即ち他のヤクザにしてみれば〝商売のしやすい甘い土地〟という事になる。故に、三条の縄張りを狙う輩は後を絶たない。

平和だからこそ、最も危険な場所。しかし、その二律背反が成立しているのである。

警察官僚とも友好的な関係を築き、関東一帯の連合上層にも顔が利く三条光利という最強の盾。

そして何より、その三条の持つ最強の矛――伝説のヤクザ、〝三条の鬼〟。

三条組若衆頭、鬼瀬龍平がいるからだ。

■□■□■□

『荒吐組の奴ら、最近手口があからさまになってきましたね』

車を運転しているのは、まだ若い……というより、幼いという表現こそ似合いそうな顔立ちの青年である。適度な長さに切り揃えられた黒髪に、若干の釣り目。その身に似合わない

ビシッとしたスーツを着ている。名を燕という、立派な三条組構成員だ。

『こちらは基本、専守防衛の姿勢だ。無駄に事を荒らげる必要は無い』

野獣の唸りのような低い声は、後部座席に座っている、巨大な男の発したものだった。その体もだが、漂わせる威圧感というか、オーラが雄弁に男の強大さを物語っている。白いスーツに、開襟された濃紺のワイシャツ。彫りの深い強面。〝三条の鬼〟――鬼瀬龍平である。

『だが、向こうから手を出してきたなら、容赦する筋合いは一つもねぇ』

『……』

鬼瀬の言葉に二言は無い。これまで、三条の土地を狙おうとちょっかいを出してきた荒吐組のチンピラ達は、一人残らず鬼瀬に叩きのめされてきた。

あの出会いから数年。当時、まだ若衆の一人でしかなかった鬼瀬は、今やその若衆を束ねる頭の地位に立ち、組長と並んで組を支えるほどの太い柱となっていた。

鬼瀬龍平は、やると言ったら徹底的にやる。そしてその様は、〝鬼〟と表現して差し支えないほど恐ろしい。

その様を想起し、ぶるりと、燕は身を震わせた。

『……と、携帯が……』

そこで、燕の携帯電話に着信が入る。

『すいません、鬼瀬さん。ちょっと停めますけど、いいですか？』

『……ああ』

ちょうど河原だった。堤防の上を走る一本道で、燕は黒塗りの車両を停車させる。通話中の燕を車の中に残し、鬼瀬は外へと出た。そして胸ポケットからタバコを一本取り出すと、口に咥え火を点ける。

苦い煙で肺を満たし、そして虚空に吐き捨てる。河原の上から望む風景を無為に眺め、鬼瀬は紫煙を燻らせていた。

『……』

ふと。鬼瀬の視線があるものを発見する。堤防の下――橋げたの付近、そこに、女の子がいた。幼い……小学生にも満たないだろう一人の少女が、橋脚の下へと向かっている。

気がかりだったわけではないし、その少女を知っていたわけでもない。ただなんとなく、鬼瀬は芝の生えた堤防を降り、その場所へと向かう。そして、そこで少女が何をしているのかを見た。

少女は、段ボール箱に入った捨て犬に餌を与えていた。

『あ……』

近づいてきた鬼瀬の姿を見て、少女は思わず声を漏らす。見上げるような大男だ。怖がらないわけがない。

『……捨て犬か』

鬼瀬は呟く。その言葉に、少女は数瞬の沈黙の後、こくりと頷いた。

『うん……うちじゃ飼っちゃダメだから、餌だけ持ってきてるの……』

鬼瀬は膝を曲げ、子犬へと手を伸ばす。鬼瀬の大きな手に前足を乗せ、子犬は指先をぺろぺろと舐める。少女は、間近で見た鬼瀬の目が、優しい温かみを持っている事に気付いた。

『そうか……大切にしてやれよ』

『……うん！』

■□■□■□

『すいません、鬼瀬さん。組からなんですけど、ちょっと野暮……』

河原を降りた燕は、橋脚の近くでしゃがみこんでいる鬼瀬へと駆け寄り、携帯を差し出そうとして――言葉を止めた。

子犬を撫でながら、誰とも知らぬ少女が嬉しそうに話している。それを聞く鬼瀬の顔が、まるでその子の父親のように優しく見えたからだ。

『……』

そして、そんな鬼瀬の姿に面食らったが、燕もまた微笑みを浮かべる。

こういうところが、自分がこの人を好きになった理由なのだ。と、思いながら。

試読版第二弾はここまで！
続きはＧＡ文庫「そのオーク、前世（もと）ヤクザにて」でお楽しみ下さい！